生活・文化3

太秦・嵯峨野の古道

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

南西上空からみた太秦・嵯峨野　右手奥の丘陵が双ケ岡、左手前は桂川。

京都の西郊、右京区太秦・嵯峨野地域では、近年になって新たな遺跡が数多く発見されている。これは主として広域下水道整備事業による掘削工事が右京区一帯で実施され、工事にともなう立会調査が進められていることによる。新発見の遺跡には、集落・寺院・邸宅・古墳・古墓・瓦窯など多岐にわたっている。これらのうち注目すべき遺構に路面がある。

太秦・嵯峨野地域での路面の発見は1987年5月に遡り、以後現在までに10数地点を数える。路面は0.5～2cmの堅くなった土や砂礫の互層が50cmに及ぶ厚さとなって確認される。これは永い期間にわたって繰り返し補修を受けた結果と考えられる。

路面には遺物の混入がほとんどなく、時期を決定することが非常に難しい。しかし、路面を発見した地点を追っていくと、幹線道路ではなく、ある脇道と重なり合う。では、この何層にも積み重なった路面をもつ道は、いつ成立したのであろうか。

この道はJR花園駅付近から御室川を渡り、嵯峨野の台地を東南から北西にゆるいカーブを描きながら広沢池・大覚寺東辺に至っている（図1・A）。さらにこの道の南方に、蚕ノ社前付近を発し、広隆寺門前から同様な傾きをもって南東から北西に向かい、阿刀神社付近で有栖川を越え、大覚寺南辺に達する道がある（図1・B）。前者の道筋上に「太秦北路町」の町名が残り、この道がかつて“北路”と呼称されたものであり、後者の“南路”と対をなしたとも考えられる。また‘千代の古道’と雅称をおくられた道がこれにあたっているのかも知れない。これらの道は山背国葛野郡の条里の規制を受け

たと考えられる方位の揃った道とは異質な傾きをもっている。このことから条里制施行以前に成立したものとみてまちがいあるまい。

太秦・嵯峨野地域で、確実な集落遺跡として知られているものでは、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代後期のものがある。しかしこれらはすべて、太秦台地とその周辺や桂川の旧自然堤防上に限られている。北側の山麓沿いに集落遺跡が存在する報告は未だ聞かない。とすれば、これは村々を連絡した道と考えることはできない。

5世紀後半以後、後に蜂岡寺（広隆寺）の建立される太秦蜂ケ岡を囲むように6基の大きな前方後円墳や双ケ岡一ノ丘頂上の大円墳が相次いで造られる。これとやや築造時期を遅らせながら嵯峨野台地にも中規模な円墳や方墳が姿を現わし始める。6世紀後半から7世紀前半に至ると、嵯峨野北部の山麓や山腹一帯には200基近い円墳と方墳が爆発的な勢いで成立する。

立会調査で発見された路面跡

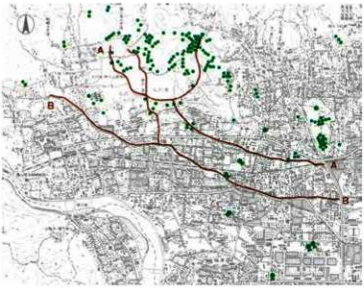

図1　太秦・嵯峨野の古道と古墳（1/50,000）　━古道　●古墳

国土地理院発行「1：25,000地形図京都西北部」を調整

こうしてみると、図に示した道が嵯峨野台地に古墳を次々と造りながら伸長し、山麓や山腹の古墳群を志向していることは明白であろう。この道は造墓・葬送・墓参としての目的をもったものであり、嵯峨野の墳墓群の造営と相前後して成立したものと考えられる。また常に丁寧な補修が加えられるなど、維持管理のための不断の意志がはたらいたことがうかがえる。

太秦・嵯峨野に展開するおびただしい墳墓群が、『新撰姓氏録』の山城国諸蕃条に秦氏九十二部一万八千六百七十人を秦酒公が率いたと記録される、山背国葛野郡を本拠地として京都盆地枢要部の開発に成功した秦氏一族の所産であることは論を待たない。この道は彼らの邸宅から発して奥津城としての太秦・嵯峨野の一大葬送地に至る「聖なる道」であったということができよう。

さらに、7世紀前半には、広隆寺の他にも秦氏一族による寺院が建立されたという伝承がある。8世紀の末葉に至ると桓武天皇による平安京の造営が始まる。その後まもなく平安京の西北郊外にあたる太秦・嵯峨野は天皇や貴族たちの脚光を浴びる。遊猟地（御狩野）や別業地として多くの邸宅や寺院が造られ始め、往来が頻繁になる。双ケ岡東麓に清原夏野の山荘、西麓に源常の邸宅、北嵯峨・嵐山では嵯峨天皇の離宮（後の大覚寺）、観空寺、檀林皇后の檀林寺、源融の栖霞観（後の清涼寺）、太秦西方に平高棟の平等寺などが成立する。

平安時代以後、嵯峨野奥部や嵐山地域へと行き先と目的が大きく変化し、旧道の伸長や条里に基づく新道が成立していく。しかし、この道は主要部分で踏襲され続け、都の貴族たちなどのしきりに往還する道へと再生を果たし、新たな装いを施して現代に受け継がれたのである。

（平田　泰）